NPO 法人 都市災害に備える技術者の会

技術者の会 〝ニューズレター〟(issue23)

Professional Engineers Association of Urban Disaster Preparedness

発行日：平成 24 年(2012 年)1 月 1 日
事務局：(太田ジオリサーチ内)
都市災害に備える技術者の会
〒651-1432
兵庫県西宮市すみれ台３－１
TEL:078-907-3120 FAX: 078-907-3123
URL:http://toshisaigai.net/
e-mail: office@toshisaigai.net

1.巻頭言

理事長　室崎益輝

謹んで新年のご挨拶を申しあげます。

昨年は、とても悲惨で過酷な１年でした。

昨年３月の未曾有の被害をもたらした東日本大震災は言うまでもありませんが、それに加えて８月から９月にかけての台風 12 号や 15 号など、大規模な災害が次々と発生しました。まずは、犠牲になられた方には心からの哀悼の気持ちをささげ、被災された方には心からのお見舞いの言葉を差し上げたいと思います。一日も早い被災からの回復を願わずにはいられません。それにつけても、今年こそは平和で災害のない安全な年であってほしいと、思わずにはいられません。

ところで、安全や安心は与えられるものではありません。まして神様に祈るだけで得られるものでもありません。それは、骨身を惜しまない努力の結果として得られるものであり、皆で力を合わせて築き上げるものであることを、新年にあたり確認しておきたいと思います。南海トラフでの超巨大地震や首都直下型地震の発生が、秒読みならぬ年読み段階に入った今、一人ひとりの減災への真摯な努力が今ほど求められている時はありません。それだけに、私たちの「都市災害に備える技術者の会」の責務も大きいと言わざるを得ません。

理事長　室崎益輝

目　次

1. 巻　頭　言…… 1
2. ご　挨　拶…… 2
3. 事 務 局 よ り …… 5
4. ﾜｰｷﾝｸﾞｸﾞﾙｰﾌﾟの活動報告…… 5
5. 編　集　後　記…… 8

翻って、私たちは今まで何をなしてきたか、あるいはこれから何をなすべきかを、改めて問い直す必要があるでしょう。今までの、技術者の立場からの、市民や行政とのネットワークづくり、市民の防災形成に向けての協働の取り組みなど、私たちが進めてきた活動トその成果には自信と確信を持つ必要がありますが、それに満足することは許されません。災害リスクの著しい増大という今日の状況が、私たちの組織をもっと大きくすること、私たちの組織がもっと前に進むことを求めています。

さて、東日本大震災の復興と次の大災害の減災に向けて、私たちが何をなすべきかを考えてみたいと思います。今回の東日本大震災は、福島の原発事故も含めて、技術科学のあり方と技術者の社会的責任を厳しく問うもの、との認識を持つ必要があります。それだけに、まずは技術者自身にその責任と倫理を問いかけることが欠かせません。減災の必要性を社会に対して発信することも大切ですが、減災の倫理性を技術者自身に発信することも大切です。技術者の中での真摯な論議を引き起こすために一石を投じることが、私たちに求められています。

その上で、今の被災からの復興と次の災害に備えての減災の課題に総力を挙げて取り組んでいくことが欠かせません。被災地は、いよいよこれからが復興の

本番です。ところが、その復興においては、まちづくりのノウハウの提供など技術的な支援を図るマンパワーの不足が大きなネックとなっています。このネックの解消のために力を尽くさねばなりません。他方、次の巨大災害に向けての対策の強化も急がれており、ここにおいても専門家としての技術者への期待が大きく膨らんでいます。この期待に応えることが欠かせません。

さて、私たちの組織の創始者で名誉理事長であった笹山幸俊さんが、昨年末にご逝去されました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。私たちにとっての大きな支えを失ったわけですが、上述の課題にしっかりと応えることが、笹山さんのご遺志に報いることだと考えます。こうした様々な困難を乗り越えて、努力して参りたいと思います。皆様のご支援を今年もよろしくお願いいたします。

2. ご挨拶

２０１２年を防災・減災の年に

国土交通省　政策統括官　大森　雅夫
〈元内閣府防災担当政策統括官)〉

ＮＰＯ法人都市災害に備える技術者の会の皆さまに、２０１２年を迎えるにあたり、ご挨拶を申し上げます。

昨年３月に発生した東日本大震災は、まさに未曾有の大災害となってしまいました。国土交通省は、関係府省と連携して、被災地の復旧・復興に全力をあげて取り組んでまいりました。本年は復興庁も発足します。昨年成立した「東日本大震災復興特別区域法」及びそれに基づく復興交付金等の予算措置、「津波防災地域づくりに関する法律」等を活用して、復興庁とも連携しつつ、被災地の復興を本格化・加速させるよう、本年も全力を尽くす所存です。

省みますと、平成７年に発生した阪神・淡路大震災以降も、平成１６年の新潟県中越地震をはじめ、多くの震災が我が国で発生しています。昨年も、霧島山新燃岳の火山噴火、台風第１２号及び１５号による被害など、東日本大震災のほかにも多くの災害が発生しました。

よく知られているように、我が国は自然災害に見舞われやすい国土の特性を持っています。特に、今後起こると予測されている首都直下地震、東海・東南海・南海地震等の大規模な地震災害等に対しても安全で安心な、災害に強い国土への再構築を図ることが、喫緊の課題として強く求められています。

現在、国土交通省では、前田国土交通大臣のもと、「持続可能で活力ある国土・地域づくり」を進めるために省内横断的な体制を整備して具体の検討を進めています。その中の重要なテーマの１つに「安全と安心の確保」を位置づけています。

ＮＰＯ法人都市災害に備える技術者の会の皆さまが、これまで、都市災害に備える様々な活動をされていることに深く敬意を表します。特に近年は防災・減災のためのネットワークづくりを活動の主要テーマと位置づけられており、その点についても、共感をするところです。

本年を、我が国にとって防災・減災を推進するための年とするべく、国としても一層努めてまいりますが、ＮＰＯ法人都市災害に備える技術者の会におかれましても、防災・減災のネットワークをさらに充実されることを祈念して、ご挨拶とさせていただきます

津波防災地域づくり

国土交通省総合政策局総務課長　　渋谷　和久
（元内閣府防災担当企画官）

新しい年、２０１２年を迎えました。昨年は、東日本大震災という未曾有の大災害を受けて、様々な分野で大きな変化がありました。

もっとも大きな変化は防災に関する考え方です。これまで、津波防災対策は、一定の頻度で想定される津波に対して、防潮堤等の海岸堤防を整備するというハード対策を行ってきました。しかし、昨年７月、社会資本整備審議会・交通政策審議会の計画部会は、「災害に上限なし」という前提で、今回のような、低頻度だけれでも甚大な被害をもたらす巨大津波に対しても、「何としても人命を守る」ことが最も重要な目標であり、ハードによる「一線防御」から、ハード・ソ

フト施策の総動員の「多重防御」による防災、減災の仕組みを検討することが必要である、との「緊急提言」を取りまとめました。

国土交通省では、この「緊急提言」を踏まえ、「津波防災地域づくりに関する法案」を臨時国会に提出、全会一致で成立し、１２月２７日に施行されました。この法律は、津波災害に強い地域づくりを被災地はもとより全国に広げていくことを目的とした全国法で、津波による災害の防止を図るため、市町村による推進計画の作成、津波災害警戒区域における警戒避難体制の整備並びに津波災害特別警戒区域における一定の開発行為及び建築物の建築等の制限に関する措置等について定めたものです

これまで、海岸堤防の整備などのハード対策は、一定規模の外力を想定して、それを防ぐことを目標としてきました。一方で、必ずしも津波防災を目的として作られたわけではない、たとえば盛土構造物が、津波による浸水拡大に一定の効果を発揮することもあります。民間の高層建築物が避難ビルとして活用しうることもよく知られています。また、まちづくりを進める中で、たとえば区画整理事業の中で、宅地のかさ上げをすることができれば、津波対策にも効果があります。「津波防災地域づくり法」は、このような津波防災・減災に関連する多様な事業・施策を、地域特性を十分踏まえて柔軟に組み合わせるとともに、国と地方公共団体とが適切に連携することで、「総力戦」により進めること、つまり、従来の発想をこえて、津波防災・減災の事業・施策をまちづくりと一体となって実施することを可能とするような仕組みなのです。

低頻度大規模災害にどう備えるか、というのは、古くて新しい課題です。今後起こると予測されている首都直下地震、東海・東南海・南海地震等の大規模な地震災害、あるいは今後起こりうる大規模な火山災害や洪水等に対しても安全で安心な地域づくりをどのように進めていくか、の１つの方向性を示すものが「津波防災地域づくり法」です。

本年は、ＮＰＯ法人都市災害に備える技術者の会をはじめとする専門家集団とともに、このような防災・減災対策を推進していくための様々な取り組みを進めていきたいと考えておりますので、従来以上のご協力とご尽力をどうぞよろしくお願いいたします。

新年のご挨拶

公益社団法人　日本技術士会会長　内村 好

NPO 法人「都市災害に備える技術者の会」（以下、「技術者の会」）の皆様には、ご健勝で新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。「技術者の会」は 2004 年 4 月の設立以来、継続的に活動されていることに対して関係者の皆様に敬意を表します。

昨年発生しました東日本大震災において、多くの技術士の皆様は所属する企業や行政機関、団体等において、それぞれの立場で復旧や復興への貢献をされました。日本技術士会としては、防災会議を設置し地域本部や部会等の活動を統括し支援してまいりました。しかしながら、個人会員からなる日本技術士会の特性をどのように防災に活かすかについては課題も残っております。その意味で、行政と市民をつなぐ組織として発足した「技術者の会」は技術士の活躍の場を提供する一つのモデルと言えます。

阪神淡路大震災や東日本大震災の経験を活かし、来るべき災害の被害を最小限にとどめる役割の一端を我々技術者は担っております。「技術者の会」の関係者の皆様の本年のご多幸をお祈りすると共に、会の益々の発展を期待いたします。

新年ご挨拶

公益社団法人　日本技術士会
建設部会長　　高木　茂知

2012 年の年頭にあたり一言ご挨拶申し上げます。

東日本大震災で被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。東日本大震災では、大きな揺れと津波による被害に加え、福島第一原子力発電所の事故による放射能被害も加わり、まだまだ先が見えない状況です。一日も早い復旧と復興がなされるようお祈り申し上げます。

さらに、７月末の新潟・福島豪雨に続き、９月には紀伊半島を中心とした記録的な豪雨災害が発生しました。一方、東海、東南海、南海の三連動地震の発生

も現実味を帯びてきております。私たち、社会資本整備にかかわるものにとって「安全、安心な国土づくり」を実現していく正念場といえます。

建設部会では、災害時に地域住民と行政との橋渡しをしていくためには、人と情報と技術のネットワークづくりが重要と認識し、活動を進めていこうとしているところです。貴法人では、以前から防災・減災に向けたネットワークづくりへの取組みが継続的にされており、その熱意とご尽力に敬意を表します。今後益々のご活躍を祈念しております。

新年のご挨拶

（公社）日本技術士会　防災支援委員会
委員長　　大　元　　守

平成 24 年の新年に当たり、防災支援委員会委員長として、ご挨拶申し上げます。

昨年は、東日本大震災が発生し、死者・行方不明者は 1 万 9 千人を超え、東北 4 県の津波浸水面積は 507 平方キロにも達しました。

また 9 月には台風 12 号が紀伊半島等に大きな被害をもたらし、近畿本部に「防災会議」を設置し、「台風 12 号紀伊半島災害調査」を実施して頂いたところです。

このように、連続的な大規模災害が発生している中、防災支援活動の社会的取り組みの重要性が、更に強く認識される次第です。

我々防災支援委員会も、東日本大震災復興支援では、原子力・放射線部会とともに警戒区域の復興ビジョン策定作業支援や被災地区の復興計画づくりでのワークショップ支援を地域住民とともに行ってきました。

大規模災害への備えは、減災に対する地域防災力を高めることが最も重要で、これからも貴会と連携しながら、地域住民と一緒になった地域の防災・減災活動の継続に努めて行きたいと思います。

新年のご挨拶

公益社団法人　日本技術士会
元会長　　梅　田　昌　郎

新年おめでとうございます。ここで、昨年を振り返りますと、地震、津波、原発事故という、かつて人類が経験したことのない三重苦と戦った1年であったことを、改めて痛感するものです。

阪神淡路震災の時にも感じたことですが、現在の自然科学と近代技術とは十分に噛み合っていないのではないか、という疑問です。400 年前に京都で地震を起こした断層の延長上で発生する地震を神戸地区の計画には考慮していなかったことを反省している内に、今度は 1,300 年前に発生した津波が平成の時代に襲って来るという初めての体験をさせられました。

限りある財源の中で、経済性との整合を図りながら計画を進めて行く手法は今後も変わらないと思います。しかし、これからは、この計画値を上廻わる地球的自然科学の値を見据えて、計画を担当する技術者の人間性が滲み出るようなコメントを附けるべきと考えます。

“NPO”の活躍を期待しています。

新年のご挨拶

(公社)日本技術士会近畿本部 本部長　福岡　悟

新年あけましておめでとうございます。新しい年が会員の皆様にとりまして幸多い年でありますことをお祈りいたします。日頃より当近畿本部建設部会と連携し、技術者、行政、市民の方々との連携のためのネットワークつくりを目指した活動を通じ、防災・災害に備えられ、多大な成果をあげてこられたことに対し敬意を表します。

昨年を振り返ってみますと、3 月 11 日には東日本大震災が発生し、地震と津波により多くの尊い人命資産が失われ、さらには原子力発電所の事故が発生し私たちの生活に大きな影響を与えました。また 9 月 3 日には台風 12 号が来襲し、紀伊半島を中心に豪雨をもたらし、土砂災害による多くの犠牲者を出し、河道の閉塞を発生させるなど、非常に災害の多い年でありました。我が国は地理的、地形的に災害が発生し易い国であるだけに、この様な大災害が当分は発生しないとは言い切れません。貴会の活動のように日頃のからの備えが重要でありことは言うまでもありません。貴会の今後の益々の発展とご隆盛を心からお祈り申し上げご

挨拶と致します。

3. 事務局だより

新年おめでとうございます。会員をはじめ、ご家族の皆様には良い年を迎えられた事をお慶び申し上げます。

さて、阪神・淡路大震災からすでに 17 年が経ちました。そしてこれが切っ掛けとなって、NPO 法人「都市災害に備える技術者の会」が創設されたのでした。（2004 年 4 月）その活動目的は大震災によって発生した混乱とその被害に対して、平生よりネットワークづくりをもっと備えようというものでした。

この法人設立に当たっては大震災の被災地である神戸市笹山幸俊市長（当時）に相談を持ちかけた所、即刻発起人を引き受けられました。同じく兵庫県では復興担当の経験をされた溜水義久副知事（当時）や旧知の関係から河田惠昭京大防災研教授（当時）、室崎益輝神大都市安全研究センター教授（当時）、新田保次阪大工学部教授の諸先生方と話し会った結果、NPO 法人の承認機関として内閣府（防災担当）経由で手続きが進められました。当時、相談相手の山本政策統括官は私達の構想を聞かれた上で創設についてご協力下さる事になりました。その上で活動の場を近畿一円のみならず、全国的展開を計るよう期待されました。この事は今でも続いていて、技術士会のような組織を利用してみるのも一策でしょうか。

それは全く根拠のないことではありません。それはここ数年来のことですが、皆様の中にもすでにお気付きの方もおられる通り、笹山先生のご挨拶の中に時折見られた、技術士や技術士会の組織を利用できぬかと言うものです。このように公益社団法人とのコラボレートを考えてもよいと思われます。

事務局長　　山田俊満

4．ワーキンググループの活動報告

前号以降の代表的活動を以下に記す。

Ⅰ　WG 活動

現在当 NPO の WG 活動には A～E まで 5 つのワーキンググループ(WG)がある。

昨年、グループ活動の内容を分りやすくということからグループ名称を次のように変更した。

- 防災教育WG（WG－A）
- 地震災害の減災WG（WG－B）
- 地盤防災WG（WG－C）
- 草の根防災WG（WG－D）
- 産業ワーキンググループ（WG－E）

【防災教育WG（WG－A）の活動報告】

WG－A　代表　西山峰広　　担当　佐藤裕一

（京都大学大学院工学研究科

当 NPO の「防災教育WG」活動グループは，東北関東大震災被災地の調査・資料収集を行いました。本調査は日本建築学会調査団に同行して実施したもので，2011 年 4 月 29 日～5 月 1 日の 3 日間，福島市周辺を調査しました。調査地は，福島市（震度 5 強），国見町（震度 6 弱），桑折町（震度 6 弱）の 3 市町で，レンタカーおよび徒歩により移動し，可能な限り多くの被災建物の情報を収集しました。上記 3 市町では，老朽化した木造建物，組積造倉庫等に倒壊例が多く見られました。また地滑りにより 10 棟程度の戸建住宅が倒壊した場所がありました。RC 造，S 造の倒壊は一棟にとどまりました。ただし RC 造，S 造にも雑壁の損傷，ガラス窓の破損が見られたほか，通信鉄塔の柱脚塑性化などが確認されました。その一方で，古い組積造倉庫の中にも耐震補強により無被害であった事例も見られました。

地滑りによる戸建住宅の倒壊

ＲＣ集合住宅の雑壁のせん断破壊

エキスパンション・ジョイント位置のガラスの損壊

通信鉄塔の柱脚塑性化

耐震補強が施された組積造の倉庫

本グループは、これらの調査資料を整理し、今後の防災教育や啓発活動に反映していきたいと考えています。

【地震災害の減災WG（WG－B）の活動】

WG－B　代表　石川浩次（企画委員）

【地盤防災WG（WG－C）の活動】

WG－C　代表　太田英将（理事）

地震災害の減災WG（WG－B）および地盤防災WG（WG－C）では、一般市民の方々へ、地震災害・地盤災害の知識と防災への動機をもっていただくことが重要な段階となっている。このため、草の根防災WGと一緒にその情報を伝える方法（リスクコミュニケーション）等について学ぶなどの活動を行った。

【草の根防災WG（WG－D）の活動】

WG－D　代表　伊藤東洋雄（事務局次長）

草の根防災WG（WG－D）では、現在１８名のメンバーで２ヶ月に１度定例会議を開くとともに幼稚園から大学まで防災に関する出前授業を行っている。また、各種団体向け防災講演の実施や会員の資質向上のための研修・講演会も行っている。

前号報告以後の主な活動は次の通りである。

（１）出前授業

①H22,12,20　徳島大学　約 80 名

「地滑り対策工」

②H23,01,12　奈良県王寺町立王寺幼稚園

約 140 名　防災紙芝居

「ぶーたんととんとんの『じしんがきたらどうするの？』」

王寺幼稚園での紙芝居

③H23,01,13　奈良県生駒市立生駒東小学校

6 年生約 120 名

「阪神・淡路大震災の様子を聞き、地震への備えを学ぶ会」

紙ぶるるに筋交いをいれ効果を実感

筋交いの効果の説明

④H２３,05,27　奈良県王寺町立王寺北小学校

５年生約６０名　「阪神・淡路や東日本大震災の様子を聞き、地震への備えを学ぶ会」

質問をする子供たち

（２）研修会

①H23,02,05　矢守克也（京都大学防災研教授）

『災害リスクコミュニケーションのジレンマ』

於　大阪市立総合生涯学習センター

参加者　２２名

意見交換会の様子

②H23,05,28　石川浩次氏

『地震発生の基礎知識と南海・東南海・東海地震の襲来に備えて』　於　こうべまちづくり会館

参加者　２３人

質疑応答の様子

（３）他の団体との交流

①H23,04,02 大津市にある自主防災組織「山中比叡平学区自主防災会」に出向き、意見交換を行った。併せて、当該地域住民が抱える「地すべり」、「土石流」、「急傾斜地」、「液状化」による住民の不安に対し地盤に関する専門技術者として安全性診断を行った。

調整池上流部法面状況視察

②H23,04,20　泉南市防災技術者の会を訪問し、今後連携を深め活動の一層の活性化を図ることとなった。

活動内容の報告

【産業ワーキンググループ（WG－E）の活動】

WG－E　代表　北村　友博

このグループ発足に際してメンバーを募りますので、ご一緒に研究を希望される技術者の皆さんは、北村友博(kitamura@peak－cg.com)まで、ご連絡ください。

一定のメンバーが集まった時点で、研究会を立ち上げる予定です。多数のご参加をお待ちいたします。

Ⅱ　幹事会活動　　幹事長　山田信祐

平成２１年１１月に第１回幹事会を開催して以降、これまで 15 回の幹事会を開催し、幹事会規約制定や当ＮＰＯの今後の活動内容について議論してきました。特に、当ＮＰＯの設立趣旨、経過を尊重し、技術士会近畿支部建設部会と連携を図りながら自治体、市民団体、他のＮＰＯなど多様な機関、団体との連携、ネットワークの構築を主たるテーマに据え、技術者として何をすべきか、何が出来るかを議論し、実践しているところです。

合わせて、今回の東日本大震災への対応を当ＮＰＯ自らの課題ととらえながら、東南海、南海地震をはじめ、来るべき都市災害に備えた啓蒙・啓発、防災教育の実施などを地道かつ草の根的に進めていく予定です。今後も「志」を高く持ち、少しでも社会貢献出来るＮＰＯを目指して、活動を続けていきたいと考えております。

2012年 カレンダー 平成24年

1 January

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2 February

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29			

3 March

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

4 April

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

5 May

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

6 June

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

7 July

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

8 August

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

9 September

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

10 October

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

11 November

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

12 December

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

5．編集後記

今号については当然のことながら新年特集号である。いつものペースで原稿をあちら、こちらとお願いしたが、これでやっと発刊日の遅れを取り戻したやに思ったが想定外のことが起こった。

昨年 10 月中頃だったか、本会の笹山幸俊名誉理事長の秘書氏より急電あり、「明日面会の許可があったので来院されたし」との事で、おっとり刀でかけつけた。「手を握り乍ら話してあげて……」と付添氏よりの伝言。弱々しいが一所懸命話して下さった。「お元気ですか、と言っておられますよ」と付添氏。こんな時にまで気を遣っておられるのかと、思わず絶句。半世紀に亘る公私のご交誼の最後となった。

「今年は大変な事になりそうです。防災・減災の為のネットワークづくり、私たちの活動もこれからも益々大事になりますよ。……」と話しておられ、５月の連休明けの行事の最終打ち合わせが突然中止。12 月 10 日の逝去。巨星墜つ。私達残されたものは笹山先生の遺志を十二分に後世へ引き継ぎたいものだ。

笹山先生についての記事は別に特集号としたい。

山田　俊満